

周藤芳幸編 Yoshiyuki SUTO (ed.)
Transmission and Organization of Knowledge in the Ancient Mediterranean World.
 Wien: Phoibos Verlag.

本書は、2021年（実際には2022年の1月末）にオーストリアの学術出版社フォイボス・フェアラークから刊行された論文集である。何分にもさまざまな国（所属研究機関でカウントすると、日本7、イギリス3、ギリシア3、アメリカ2、オランダ1、オーストリア1、イスラエル1）の研究者が執筆した英語論文を編集して国外の出版社から刊行するのは初めての経験だったので、ここでは本書の内容ではなく、この企画の発端から現物が完成するまでの顛末を紹介しておきたい。

2018年の9月に、第4回日欧古代地中海世界コロキウムを、科研費基盤(A)「古代地中海世界における知の伝達の諸形態」の最終成果報告会として開催した。この研究集会は、実際には前年度申請をしていた科研費基盤(A)「古代地中海世界における知の動態と文化的記憶」が採択になったため、当初の計画（国際研究集会の開催費を見込んだ前科研の最終年度の経費）よりも少ない予算で行うことを余儀なくされたり、さらには初日に大型の台風が名古屋を通過したり（国外からの参加者たちは、休憩時間にカンファレンス・ホールの窓から物珍しそうに外の暴風雨に見とれていた）と、いろいろなハプニングに見舞われたものの、金山弥平教授や川本悠紀子准教授（当時はYLC特任助教を務めており、伊勢神宮へのエクスカッションでは英語で見事なバスガイドを務めていただいた）をはじめとする多くの同僚、研究仲間の支援もあって、無事に終了することができた。

さて、このコロキウムでは、当初そのプロシーディングスを *KODAI*（古代）という国内の欧文雑誌の特別号として刊行することを予定し、そのように参加者にも案内していた。しかし、終わってみると、これだけ著名な古代ギリシア史やローマ史の研究者が寄せてくれたペーパーを *KODAI* に掲載するのはもったいない（と言うと、長年この貴重な欧文学術雑誌の刊行に尽力されてきた先学には大変申し訳ないのであるが）気がしてならない。そのときふと思い出したのが、科研費のメンバーである筑波大学の長田年弘教授（古代ギリシア美術史）が、2016年に彼の率いるパルテノン・プロジェクト・ジャパンの報告書をウィーンのフォイボスから出版していたことだった。幸いにも、本書に寄稿している元ウィーン大学教授のマリオン・マイヤーさんのパートナーであるヨハネス・バウアー氏がこの出版社の営業部に勤めているという縁もあって、マリオンさんに打診してみたところ、この話はとんとん拍子に進んだ。こうして、コロキウムでの報告者には2019年の9月末を締め切りとして原稿を依頼し、2019年の8月には、出張先のアテネのとあるレストランのテラスで、ギリシアの爽やかな夜風に吹かれながらマリオンさんと出版に向けて祝杯をあげるにまで至った。つまり、ここまではいたって順調だったのである。

ここで話を先に進める前に、原稿を依頼する際にどのような点に留意したのかということにも触れておきたい。この日欧古代地中海世界コロキウムでは、桜井万里子先生（当時は東京大学教授）を日本側の代表として2005年にその第一回がロンドンで開催されたときから、ギリシア考古学者として著名なキャシー・モーガンさん（当時はロンドン大学教授、後に在アテネ・イギリス考古学研究所の所長を経て、現在はオックスフォード大学オール・ソウルズ・カレッジ教授）からいろいろアドバイスももらっていた。そのキャシーからまず忠告されたのが、原稿を依頼する際に、注と文献リストの体裁を前もってしっかり指示しておくように、ということだった。そこで、この頃ちょうどライデンのブリル社から出版される予定の論文集に寄稿する話に来ていたこともあって、あまり深く考えることなく、その手許にあったブリルの注と文献リストのサンプルを寄稿者に送って、これに従ってくれるように依頼したのであるが、後から思えば、これはあまり賢明ではなかった。というのも、このサンプルのフォーマットはヨーロッパ大陸型とでも言うのか、典型的なイギリスの大学出版会のスタイルともアメリカの大学出版会のそれとも異なっていた。そのため、寄稿時にこれに忠実に従ってくれたのはキャシーくらのもので、多くの執筆者がそれぞれの方法で文献リストを

作ってきた結果、そのスタイルの統一に多大な時間を要することになったからである。なお、字数については文献リストを除き註込みで最大7500語と指定したが、これについては各執筆者が柔軟に解釈していたようである。

さて、2019年の夏に話を戻すと、締切の9月末までに三分の一くらいの執筆予定者からは一応の完成原稿が届いたものの、その後はリマインド・メールを送っても、なかなか原稿が集まらない状態が続き、やきもきしているうちに、年を越しても思いがけない事態が出来た。言うまでもない、コロナ禍の勃発である。日本では授業がオンラインになる程度で、本格的なロックダウンが行われなかったために実感が湧かなかったが、このときヨーロッパの多くの都市では大学のオフィスや研究所の図書室が完全に閉鎖されたばかりか、自宅から外出するのにもままならない状態が続いていた。当然のことながら、まだ原稿を出していなかった執筆者からは、史料や文献を確認できないので執筆作業がストップしている旨の連絡が相次ぎ、編集作業はほぼ一年近く停滞を余儀なくされることになった。一方で、早々に原稿を出してくれた研究者からは、刊行がいつになるのか知りたい、もし刊行の見込みが立たないのなら他のところに出すので論文を取り下げたい、といった頭の痛いメールが届くようになり、対応に苦慮する日々が続いた。振り返ってみると、この頃が精神的にはもっとも辛かったような気がする。ただ、徐々にコロナ禍が収束したこともあり、2021年7月の末に、ようやく18本の論文と新たに書き下ろしたイントロダクション、執筆者リストなどをフォイボスの編集担当者であるロマン・ヤコベク氏に送ることができた。

しかし、本当に大変だったのはここからである。というのも、ヤコベク氏からは校正用のpdfがあつという間に送られてきたものの、pdfへの校正の方法が国際的に(国内でも)共有されていないこともあって、執筆者との意思疎通はなかなかスムーズに進まなかった。もちろん、若手の研究者はpdfの直接編集機能を駆使して修正したものを速やかに送り返してくるのだが、年配の研究者になるほどこの方法には慣れていないのか、pdfをプリンアウトして手書きで修正点を指示した上でスキャンしたものを送り返すなどの方法で対応してきた執筆者も少なくなく、そうすると達筆のコメントを読解するのも一苦勞ということになる。さらに、これは日本語で編集する際も同様ではあるが、校正の段階で大きく修正を加えてくる大物の研究者もいらっしゃって、これにはヤコベク氏からも「校正は無理」という返事が来たため、数日かけてテキスト全文を(辞典なども確認しながら)自分で打ち直して再提出したこともあった。もっとも、これはこれで史料を改めて読み直す良い機会となったのだが、この頃は、毎朝メールを開いて校正が戻ってきたのを確認するたびに、溜息をついていたものである。もちろん、こちらから予めお願いしておいた通り、修正箇所についてはきちんとワードのファイルにまとめて指示してくださった方もいて、最初からもっとこの方法を徹底すべきだったと後悔している。

校正が進んで頁割りも確定してくると、次は索引の作成である。現在、日本語で著書を出版する際に索引作成で苦勞することはそれほどないが、この論文集の場合には、二つの理由からこの作業が難航した。一つは、同名異人などの識別である。たとえばシチリアの僭主であるヒエロンには、前5世紀に活躍したヒエロン1世と、前3世紀にシュラクサーサイの僭主(王)となったヒエロン2世がおり、それぞれがギリシアの聖域に奉納を行っているが、初出箇所にはどちらであるかが明記されていても、二回目以降については文脈を確認しないとどちらかが分からないこともあった。また、アンティオコスという人名については、本書ではそのほぼすべてがセレウコス朝のアンティオコス4世のことだったが(意外なことに、「大王」と呼ばれたアンティオコス3世への言及は皆無だった)、一箇所だけがシュラクサーサイの歴史家アンティオコスを指していた。また、ヘラクレイアという都市名の場合、結果として本書では4つの地理的に異なるヘラクレイアが言及されているため、これについても確認と識別が必要だった。

もう一つは、ギリシア語の固有名詞のラテン・アルファベットでの表記方法が研究者(あるいは母語)によってまちまちなことである(これは悪名の高い問題で、欧米で出版されている論文集でも、常にこの点が

エクスキューズされている)。一例をあげると、小アジアのエーゲ海岸の都市クニドスの場合、Cnidus、Cnidos、Knidosなどと表記されていても、これらは同じ都市のことなので、索引では一つにまとめる必要がある。また、とくに英語の場合、著名な人物については伝統的な英語表記を優先するとしても（たとえばフィリッポス2世であれば、Philip II）、そうでない人物（メッセニアの有名な彫刻家ダモフォンの父親であるフィリッポス）の場合は元の綴り（Philippos）を維持せざるを得ない。このような困難にもかかわらず、索引作成に果敢に取り組んでくれた元大学院生の竹尾美里さんと内山陽子さんには、ただただ感謝するばかりである。

唯一(?) 楽しかったのはカバーの装丁で、これには2015年の夏にデルフィを訪れた際に撮影したアポロン神殿の写真を使うことにした。早朝ということであたりにはまったく人影もなく、ゴツゴツとしたパルナッソス山の絶壁を背景に円柱が並ぶ神殿の遺構のたたずまいは、この地でアポロン神の神託という形で行われていた古代の知の伝達と組織化を偲ばせるものとして、本書を飾るにふさわしいものと自負しているところである。

なお、本書の完成間際に、寄稿者の一人であり、来日のたびに我が家にも遊びに来ていただいていたドラム大学名誉教授のP. J. ローズ先生が急逝されたとの報に接して、大きな衝撃を受けた。というのも、ローズ先生からは、お亡くなりになる一週間ほど前に校了の旨を告げるメールをいただいたばかりで、そこには、3回目のワクチン接種を受けたことなどが、いつものカジュアルな筆致で綴られていたからである。この場を借りて、ご冥福を心からお祈りしたい。

こうして、コロナ禍を挟んだとはいえ、結果として本書の完成までには足かけ4年の歳月を閲することになった。コロキアムの準備段階も含めれば、膨大な時間とエネルギー（そして心労）を要したが、これが我が国における西洋古代史研究の成果の国際的な発信の一助となれば本望である。

